

浅井辰郎先生（1914-2006）と外邦図

久武哲也（故人、甲南大）・小林 茂（大阪大）

お茶の水女子大学所蔵の外邦図目録を考えるに際して、その収蔵・保存に努力された浅井辰郎先生の役割はきわめて大きく、先生のご努力のおかげで、私たちは現在のようなかたちで外邦図と接することができるといってもよい。大学所蔵の外邦図の来歴をみると、多数の方々がこの保存や整理に関与されていることがわかる（金窪, 2004; 三井, 2004; 中野, 2004）。浅井先生は、このなかで資源科学研究所旧蔵の外邦図を系統的に分類整理し、重複分をいくつものセットとするだけでなく、それを全国の主要大学に配分された（浅井, 1999; 2007; 久武, 2005）。多くの大学に現存する外邦図コレクションの骨格をつくられたわけである。以下では、浅井先生が情熱をかたむけてこのような外邦図の分類整理にあられた背景を簡単に検討し、先生のお仕事の意義を考えてみたい。

浅井辰郎先生と外邦図との関係を考えるに際して、先生と多田文男氏（1910-1978）との関係をまず考慮する必要がある。多田氏は、第二次世界大戦末期に大本営参謀であった渡辺正氏が組織した「兵要地理調査研究会」の中心メンバーであり（久武, 2005）、その関係から、終戦直後の参謀本部からの学術研究を目的とする外邦図の持ち出しに大きく関与し、さらにその保存、整理まで重要な役割をはたした。多田氏が駒澤大学に寄贈した大量の外邦図（大槻, 2005）も、上記のような経緯の中で入手したものであろう。

さて、浅井先生の父である浅井治平氏（1891-1974）は、1921～1924年東京大学地理学教室に在学し、多田氏と交友関係を持った。これが、浅井先生と多田氏との関係のはじまりをつくったと考えてよいであろう。治平氏が30歳になって東京大学に入学したのは、小学校の代用教員・準教員をへて1912年に静岡師範学校を卒業し、教員生活を続けながら、1914年に東京高等師範学校に進学し、これを卒業して（1918年）、師範学校・中学の教師に就任してのちも、さらに地理学研究を志していたからと考えられる（「浅井



写真1 浅井辰郎先生（2003年11月）

治平・やえ等の年譜」、浅井編, 1981, pp. 217-228.)。東大地理学教室在学中の治平氏について、多田氏はつぎのように書いている。

浅井さんは私より九つ上なものですから、親爺のようなものでした。……[治平氏が]葱状構造という地形を発見されまして、それを当時おえら方の雑誌である地質学雑誌に学生のうちに発表されたという状態でした、私は浅井さんからいつでも地理学を習っていたという状態でございます。それと浅井さんには特に我々学生の意見を先生に取継いでもらうことをお願いしていました。……（多田, 1981）

治平氏が若い学生から兄のようにしたわられていたことがうかがえる。

浅井先生が1939年に京都大学文学部を卒業し、大

学院に進学後、1940年に満州建国大学の助手に就任してから、1942年に多田文男氏（当時東大助教授）が副団長をつとめる「山西学術調査」に陸軍嘱託として参加したことは、こうした治平氏を通じた関係が一定の意義をもったと考えられる。多田氏は1933年の「熱河調査」以来、数度にわたる中国大陸での調査に参加し（久武，2005；佐藤，2005）、「山西学術調査」では、当時陸軍士官学校教授であった渡辺光氏（1904-1984）とともに、計画の推進者であった。浅井先生は、この「山西学術調査」後半の五台山の調査では、気象班として独立した活動をおこなった（山本編，1943，pp. 252-261）。

浅井先生が1947年11月にソ連抑留から復員したあと、12月に資源科学研究所員に就任し、さらに1948年に法政大学の教員として職をえたことも、親子2代にわたる多田氏との縁とは無関係とは考えられない。資源科学研究所は、文部省に設置された資源科学諸科学連盟（1941-1942）を発展させたもので、1942年11月に開所した。地理部門には多田文男（東大助教授）・小笠原義勝（1914-1964）・坂啓道が所属した（佐藤，2005）。第二次大戦後民間にうつされて1971年まで存続し、研究成果として『資源科学研究所彙報』を刊行している（三井，2004）。第二次大戦終結後、中野尊正・三井嘉都夫氏らによって参謀本部から持ち出された外邦図は、各地を転々としたあと、この資源科学研究所（当時は新宿区百人町の陸軍技術研究所あと）に保管されることになった。そこで浅井先生は外邦図と出会うことになったわけである。当時を回想して、浅井先生はつぎのように書いている。

資源科学研究所に運び込まれた膨大な地図は、筆者が勤め始めた1948（昭和23）年には、一部は2階の廊下にある天井まで届く大戸棚に詰まっていたが、大部分は半地下室に埃をかぶっていた。半地下室には直径1メートルくらいのダクトが何本も縦横に走り、1、2階の元軍用実験室の有毒ガスを吸引していた模様で、地図はこのダクトの間にうず高く積み上げられていた。四方の壁には高さ、幅とも1メートルくらい窓が所々にあったが、ガラスは何枚か割れたままで、そこからロームの土埃が容赦なく吹き込み、

地図を厚く覆っていた（浅井，1999）。

雨露はかからないにしても、放置状態だったわけである。

こうした外邦図の整理は、「サンフランシスコ平和条約が締結されたので[1951年]、もうそろそろ動かしてもよいでしょう」という多田氏の意見からはじまったという。初期は整理費用もなく、なかなか作業が進まなかったが、立教大学による外邦図の買い上げにより資金ができ、整理が進行することとなった。浅井先生は学生アルバイトを指揮して一枚一枚の図を国別、縮尺別、図番号順にあつめ、図がもつともそろったAセットからTセットまで計20組をつくることになった（浅井，1999）。1967年に浅井先生はお茶の水女子大学に転勤し、上記のように整理された外邦図のもつとも充実したAセットをその所蔵とした。すでに久武（2005）が示しているように、浅井先生の整理・分類された外邦図のセットは、東京大学地理学教室、京都大学地理学教室、同東南アジア研究センター、立教大学、広島大学、筑波大学などに配分されているが、その量（約1万7千種類）からしてもお茶大の所蔵資料の重要性は明らかである。

つぎに外邦図の利用をみてみよう。浅井先生が関東の出身でありながら京都大学地理学教室に学び、また今西錦司などフィールド科学で活躍した研究者に接したことは、外邦図の利用を西日本の研究者にも拡大した。浅井先生は、内モン草原調査隊（木原均隊長、1938年8～10月）に参加するほか、建国大学着任後もミクロネシアのポナペ島調査（今西錦司隊長、1941年7～9月）に参加している。この隊員の一人であった梅棹忠夫氏は、ポナペ島への航海中のこととして、つぎのように書いている。

……時間がくると、（隊員たちの）当番は中甲板へおりて気象観測に従事した。観測は、地理学者としてこのような遠征隊の経験をつんでいる浅井辰郎さんの指導のもとにおこなわれた。種目は、海洋気象観測の型どおりに、気温、アスマン通風寒暖計による湿度、風向、風力、雲形、雲量、うねり、水色、海水温度、気圧、ポリメーターによる湿度などのほかに、自記温度計が一基うごいていた（梅棹，1990，p. 122）。

この調査の学生隊員には、梅棹氏のほか、中尾佐助氏、川喜田二郎氏、吉良竜夫氏などがいた。こうした人々とのネットワークを通じて、外邦図の利用がひろがることとなった（浅井，2007）。

この時期の浅井先生に関連してもうひとつ重要なのは、先生が小牧実繁京大教授の組織した通称「吉田の会」（総合地理研究会）の初期の活動に参加したことである。小牧教授らは当時、陸軍の高級将校、高嶋辰彦を通じて財界からの資金をうけ、地政学方面の研究と報告書の作成をすすめていた（久武ほか，2007）。このメンバーには、やはり京大地理学教室の卒業生である米倉二郎氏や別枝篤彦氏のような、のちに外邦図の利用者になる研究者がいた。

ところで、この時期の京都のフィールド科学研究者のあいだでは、今西グループと小牧グループが対立していたとする見方が表明されている（山野，1999；水内，2001）。とくに梅棹氏の小牧氏に対する批判（「探検と地政学」、1943年）をヒントに展開されたこの見方について、浅井先生にお尋ねしたところ、そのような対立は感じられなかったことを強調された。筆者は、やはり京大地理学教室の卒業生である川喜田二郎氏からも、こうした対立はなかったことを聞いており、この見方が強調する対立の構図は、浅井先生が述べられているように（小林茂・久武哲也・山野正彦・水内俊雄あて書簡、2002年4月5日）、後世の見方を過去に投影したものと考えられる。

浅井先生の外邦図に関する遺稿（浅井，2007）には、上記の研究者をふくめ、多彩な外邦図の利用者が示されている。浅井先生はこうした人々への閲覧・複写サービスを通じて、第二次大戦後に再開された、アジア太平洋地域における日本の学術調査や地域研究に貢献されることとなった。アジア太平洋地域には、現在もなお地形図など大縮尺図の入手が困難な地域もあり、手数のかかる外邦図の分類・整理作業の成果をふまえたこのサービスの意義は大きかったと考えられる。

また、お茶大の外邦図は、『朝鮮半島五万分の一地図集成』（1981年、学生社）や『台湾五万分の一地図集成』（1982年、学生社）、『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』（1999年、柏書房）といったリプリントのものになるだけでなく、『中国本土地図目録』（布目・

松田，1987）の作製にも利用された。後者に際し、マイクロ撮影された外邦図のプリントは、大阪大学東洋史学教室が利用しており、筆者（小林）もお世話になった。いずれも浅井先生がお茶大を退職したあとのものとなるが、先生が指揮された分類・整理作業がなければ、実現しなかったであろう。

ところで、筆者（小林）が外邦図研究の必要性を痛感したのは、お茶大コレクションに含まれている地図を中心に企画された上記『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』刊行の際に、浅井先生よりその由来をご教示いただいたことによる。先生は筆者のあまりに無知な質問に対して、的確に外邦図の性格とお茶大への収蔵の経過を教えて下さった。私たちの外邦図に関する作業は、浅井先生のお仕事の継承であることを、現在もつよく感じている。また筆者ら（久武・小林）がお宅にうかがい、戦前戦後のお話をうかがった時（2002年3月30日）には、芳江夫人とともに暖かく迎えて下さったことも忘れられない。あらためて浅井先生に感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたい。

なお、本稿のファースト・オーサーである久武は、胃ガンとの闘病1年半ののち、2007年7月27日自宅にて逝去した。享年60歳であった。本稿のもとになった、2007年2月17日の発表用パワーポイントについては、事前に原稿を病室に持参して相談したことを付記しておきたい。また本稿は、『季刊地理学』59（1），pp. 57（2007）に掲載されたこの発表の要旨に大幅に加筆したものである。



写真2 浅井先生と芳江夫人

文献

- 浅井辰郎編 (1981)『浅井のサガ：治平・やえの年忌に想う』浅井辰郎・浅井芳江.
- 浅井辰郎 (1999)「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」清水靖夫・浅井辰郎・小林茂・安里進『大正・昭和 琉球諸島地形図集成 解題』柏書房, 23-26.
- 浅井辰郎 (2007)「資源科学研究所の地図の行方：多田文男先生の英断」宮澤仁・高槻幸枝・大浦瑞代・内田忠賢編『御茶の水女子大学所蔵 外邦図目録』御茶の水女子大学文教育学部地理学教室, 5-9.
- 梅棹忠夫 (1990)『梅棹忠夫著作集、第1巻、探検の時代』中央公論社.
- 大槻 涼 (2005)「駒澤大学所蔵外邦図の整理状況について」『外邦図研究ニューズレター』3, 121-124.
- 金窪敏知 (2004)「終戦前後における参謀本部と地理学者との交流、および陸地測量部から地理調査所への改組について」『外邦図研究ニューズレター』2, 39-45.
- 佐藤 久 (2005)「地図と空中写真、見聞談：敗戦時とその後」『外邦図研究ニューズレター』3, 61-71.
- 多田文男 (1981)「オヤジ」浅井辰郎編 (1981)『浅井のサガ：治平・やえの年忌に想う』浅井辰郎・浅井良江, 38-40.
- 中野尊正 (2004)「外邦図と私とのかかわり」『外邦図研究ニューズレター』2, 50-53.
- 布目潮颯・松田孝一 (1987)『中国本土地図目録』東方書店.
- 久武哲也 (2005)「『兵要地理調査研究会』について」渡辺正氏所蔵資料編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科人文地理学教室, 5-19.
- 久武哲也 (2005)「日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係」『地図情報』25 (3), 7-11.
- 久武哲也・鳴海邦匡・石橋諭・小林茂 (2007)「総合地理研究会と皇戦会：初期地政学グループの活動」『2007年人文地理学会発表要旨』58-59.
- 水内俊雄 (2001)「通称『吉田の会』による地政学関連史料解題」『空間・社会・地理思想』6, 59-63.
- 三井嘉都夫 (2004)「私と外邦図」『外邦図研究ニューズレター』2, 46-49.
- 山野正彦 (1999)「探検と地政学：大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向」『人文研究』(大阪市立大学文学部) 59 (第9分冊), 1-32.
- 山本地榮編 (1943)『山西学術探検記』朝日新聞社.